

13日 昨夜は大雨、9時ころ眠りについたが、11時と3時に目が覚めた。朝の7時、雨は止んだかと喜んだが小雨・霧雨がしとしとである。コーヒーを飲み、昨夜の残りのパンを齧って、「ちょい走るか」と土の駐車場を走り出した。駐車場は小さいグラウンドぐらい、10分たち、「もうちょい」30分たち、「まだいける」とおおよそ1時間走った、ヤッケのフードをかぶり長靴で走る、オジン走りのオジンですぞ。

キタキツネがやって来た。彼らは北海道のどこにでもいる、人慣れしているのか、近づきたいのか、餌がほしいのか、それでも10Mぐらいまでしか近づかない。手でもあげようものなら慌てて飛んで逃げる。8時になってまた雨脚がきつくなった。空は明るいので昨日のような本格的な雨ではないが、見通しは暗い。気象庁の方、言葉が濁していたが、「ぐずぐずが 続きますよ」という意味だったのかな。

9:30 飯を食い、「ちょい散歩」と池のふちなど歩く。霧が出てオンネトー湖は絵葉書のように美しい。

12:30 空は明るい霧雨が降ったりやんだり、衣川さんがホテル泊からやってきて旨いものでも作ろうと調理をし始めた。彼は大きな箱からコンロ、鍋、材料を取出し、ゆっくりと丁寧に包丁でカット、味見をしながら旨いものを造る、オレの、「なんでもいい 食えればいい」とは大違い。「尾岱沼（おだいとう）まで行きましょう」という誘いに、この雨では絵も描けない、スケッチでもしながら海を見に行くかと車を走らせた。

双湖台というPに車を止めて景色を見る。北海道の道にはいくつかPが設置してある。観光目的か雪で右往左往する人のためかな。湖が二つ見えるが全体に霧がかかって上のほうは見えない。この地域、針葉樹と広葉樹が半分ずつ、黒い円錐形と明るい球、そんな緑が印をついたように次々増殖して伸びているさまはなかなかいい、そういやこの図柄、日本画の東山魁夷かな、これなら売れるね。とここでミニ事件発生。後ろからもう一台が駐車して降りてきた若いお母さん風女性がぎょっとしている。「？」なんと俺の車の左側にメロンパンの何倍もある黒い塊、「がはは オレのウンコじゃないよ クマ君だねえ」棒でつついてみようかと思ったがやめた。

北海道の道、はるか向こうまでまっすぐに続く。「そらあ みなさんスピード だしますね」「これなら高速道路は いらぬよね」そのまっすぐ伸びる道路の両側は草原、畑でも田圃でもなく草原だ。牛や馬のエサ用草を育てている。刈り取っては丸めてロールにして、白や黒のビニールで包んで積んである。時間が経つと中の草が発酵して旨い餌になるのだとか。冬は真っ白になるのだろう。北海道の雪の季節は何月頃から何月頃までかな。

尾岱沼に近づいてきた、海がもうすぐのようだ、山ではなく丘の緑がうねっている。気に入る景色があるかな、いいイメージが湧くかな、なんだか天気はよさそう、海に居続け絵を描くか、もう一度オンネトーに戻って、居続けるか、今晚寝て決めよう。もう一度雌阿寒岳に登りたい。キャンプ場の前に、野付半島を走った、トンビの群れ。「トンビ じゃないね まさか ワシ オ オジロワシだ すごい」これでシマフクロウを含め猛禽類 2種見たことになる、いややトンビも猛禽類だったかな。考えればあと4泊、なんとか絵をやっつけたい。「ほんと雨は やだよ」とぼやき節。夕方キャンプ場に車を乗り入れた。800円也。ここの地形はケタイな地形、海の前に灯台がある。明日は晴れたらここで絵を描こうと思っているのに空がだんだん暗くなってきた、雨が降ると野外で絵は描けない、困ったことだ。

夜9時をまわっている、いささか酔っぱらってきた、ウイスキーが美味しい。オレ 65歳ぐらいから酒量が減った、それまでは毎晩飲むのが日課だった、夜になると台所においてある酒をコップに、冷蔵庫に入っている旨い物を皿に入れアトリエで仕事をしながら飲んでた。一杯目が終わるとコップと皿を持って再び台所へ、一杯目と同じように二杯目を、同じく二皿目をもってアトリエへ、という日課だった。当時、酒を一日やめただけで我ながら驚いていたが、一年二年経ち、三日間やめ四日間やめ、という数字が出てきた。今回の北海道では毎日のようにアルコールが進んだ。酒量が減ると体重も減った、これは同時に食う旨い一皿のせいだったか。

14日 昨夜はウイスキーを飲みすぎたのか、4時に目覚めてしまった。北海道は朝の3時半ごろから明るくなる、そんな気候に慣れてしまった、暗くなったら眠り、明るくなったら起きる、アウトドア生活だ。寒い寒い、寒いけれど、大阪での冬の普段着、上下の温か下着を着こみ、ダウンの防寒具、ヤッケのフードを頭にかぶり、長靴姿が板についてきた。朝からカメラとICレコーダーのデータをそれぞれPCに入力、昨日、作り置きのおにぎりをほおぼって腹ごしらえ。ちょっと漁港に、と歩き出した。

漁港のそば、船が岸に上げられている隙間でキャンバスを広げた、3時間ぐらい描いた。風がきつい、頭が痛くなるほどに寒い。地元の人が、「寒い しばれる」とぼやくほどに寒い。

野付半島は漁師の作業場がいくつもある。ひとだかえもある大きな浮球、ほとんどの球がクリーム色だけど、時々、赤・黄・白と妙に色っぽい軍団がある。ブルでワイヤーを引っ張りながら、大きな長い網と球を十人ぐらいの漁師が手入れをしている、そんな作業が何組も見られた。一網打尽の網なのかな。

野付半島資料館では、明治大正昭和のモノクロ写真がいくつもかかっていた。「1940年代といえば オレと同世代の少年少女、ここも 大阪も みんな貧しく 腹が減っていたね 同世代ということは まだ健在かなあ」

尾岱沼の梅で、漁師の網にかかったマンモスの歯も出ているようだ。シベリア・アラスカでは、1~7万年前に生息していたが、このものは5万年ぐらい前のものらしい。

先ほど、会津と書かれた標識があったが、江戸時代、会津藩士がこのあたりに、開拓と北方警備に送り込まれ、この地で没した人がいたようだ。目の前に、国後島。根室や釧路は霞んでいる。「こんなに近けりゃ・腹立つね」

野付半島の付け根の街で食事。衣川さん、慣れないスマホで、「何処か 美味しいところ」と検索するが、時間がかかる、数軒回って、廃線になった元駅前の食堂で刺身定食 1500円。北海道に来る前に、「海鮮丼を 二回ぐらいは 食いたい あとは 粗食時でいい」と言っていた、期待したほど旨くないが、つべこべいうまい。札幌などの大都会では期待通りの旨い海鮮丼が食えるかもしれないが、観光客の少ない地方の町ではいいものは無いようだ。ただ旅館やホテルでは、「美味かった」と衣川さんの弁。故吉谷は、「あいつといくと 美味しいものが 食えない」と生前にイクちゃんにぼやいていたそうだが、衣川さんは、5.6泊去れたかな、美味しいものを食ったみたい。5000円足らずでガソリンを、「オンネトー に戻ろう 次は 帰りの船内で 会いましょう」と別れた。

30分も走ると、陽が差してきた、ちょっと車を止めキャンバスを広げた。牧草のうねりがいい、草原がうねって丘の麓まで広がっている。富良野ではそこに花が、作物が植えられ、「きれい」と思ったが、草だけのうねりも、富良野に負けられないようにきれいに描いてやろうじゃないか。

またすすんで、道をそれ牧舎のスケッチをした。昔ながらの北海道の牧畜農家、というような懐かしい建物はもう姿が少ない、昨今の牧舎は都会の町工場風、横に建つ自宅も大阪と変わらない近代プレハブ住宅、こんなことをぼやいても仕方がないねえ、だがその土地の風土、景色、顔つき、そんなこんなが見たいし欲しい。「ここは何にもないよ」というのがいい。

Pで休んでいると、「バツバツバ」格好いい単車にまたがった兄ちゃんが下りてきて風景を眺めている、「なんと ずんぐりむっくりの 小さい男」なんて言うてはいけないねえ。

途中に町があり、スーパーによって、晩用の弁当、いくつかのパンを買った。「摩周湖で寝たら」と衣川さんの勧めで向かった。夕方からしとしと降りだし、だんだん降りが大きくなってきた。摩周湖まですぐなので車で登って行った、ぶんぶん回るワイパー、500円の無人の駐車場、階段を上がるとなんだか下のほうに水面のようなものが見えるが、霧の摩周湖ならぬ、看板だけの摩周湖、車の中で弁当を食って、「ここはだめだ オンネトーへ」と走った。湖というのは平地に在りすぐそこに湖面があると思っていたが、北海道の湖は火山でできた穴に水が溜まったものがある、上に登ると湖があるというものだ、川の水が流れ込んだ湖では無いようだ。

15日5時前に目覚めた。昨夜はオンネトーの駐車場に8時ころ着いた。飯は摩周湖で弁当を食った、ビールを一杯飲んで9時に寝たが、11時と2時にトイレに起きてしまった。朝5時に起きたがまだ雨が降っている、カメラ・ICレコーダーのデータをPCへ、簡単食事、「これでは絵も描けないし もう一度登るか 濡れねずみになるのは やだねえ」。昨日海からの道中でバケットパンを買った、北海道ではパンを食べないのかと思われるほどにパンが店に置いていなかった。中標津（なかしべつ）を通っていると大きなマーケット、日本のどこにでもあるそんな場所を見つけパン屋も見つけた。卵・レタス・トマトをマヨネーズで混ぜ、バケットに穴を開け、どんどん詰め込んで弁当にした。これは昼に食ったがなかなかのものだった、次回帰ってからこれもこれだ。

◎雌阿寒岳は四日前にも登っている、昨夜は車に打ち付ける雨の音も大きかった、気温も下がっているのか、シラフの上に毛布を二重にかけたがそれでも寒さを感じた。まだ下着の防寒具は持っていたがじゃまくさいので出さなかった。登ろうと決めた時点でまだ小雨が降っていた。旅先で山の上、雨に打たれて、風邪でも引いたらと恐れたが、山の魅力が誘惑がまさっていた。駐車場の車から出てきた人、「登るの?」「イエス」その人もオレにつられて登ってきて追い抜き、頂上でも会った。もう一台から女性のペアが登っていった。

◎1時間ほどで先日も休憩した河原に出た。ガラスのかげらのようなものが落ちている。「誰だ 瓶を割った奴は」なんて本気で思ったが、また在る。「???」手に取ったが、ガラス?また在る。ふと横を見るとガラスの破片がたくさん、「いや まて これは氷」「なんだ 霜柱か イヤ」ハイ松の葉を見ると氷がひっついている、それが朝の気温上昇で落ちてきているのだ。上にいくほど量も大きさも半端じゃない。1時間で河原までやってきて休憩、女性の二人組がふたつ、一組はここで、もう一組は頑丈そうな白人だけれど、少し上から下った。

◎氷がだんだんすごい、製氷機でつくられたような氷がハイ松の葉に枝に、岩に着いている。後から聞いたが、「エビのしっぽ」だという。2,3人の人が登っているがどなたに聞いても知らないという。樹氷でも霧氷でもない、昨日の雨が氷点下でたちまち凍り、透明な氷になったようだ。岩に着いているものは今の朝の気温の上昇で、別の生き物のように、まだらに透明にボコボコひっつき岩を覆っている、寒天状の透明泥が岩を覆っているのか、このボコボコ生物め。寒くなってきた、手袋をはめジャンパーを着込んだ。まさかいらないだろうと、オーバー手袋は車のなか、毛糸の帽子は出るときに躊躇したが、家においてきた、これじゃ冬の山だ。

◎てっぺんまでもう少しという所で道を間違えた、上の標識を見ながらコースを外れ時間をくってしまった、なんだかすいすい歩けないね、ごろごろするね、と思いながら。といういつもの失敗を付け加えておきます。

◎3時間でてっぺんにやって来た、というよりこの山はどこがてっぺんなのかわかりにくい、河口のふちに到着してからだらだら登っていく。先日よりも少しは火口の中が見えるが、底は見えない、池も煙の噴出孔も見えない。垂直に切り立った岩が、赤に黄に、クリーム色に黒に、爆裂の後を思わせる。

◎先日もそうだったが、硫黄の臭いは身体に悪いのかね、どうも、ふっとする。幼児のころのトラウマが頭をよぎる。親が掘りごたつに豆炭か練炭かを入れていた。寒いので蒲団を顔のほうに寄せていたらどうも失神したらしい。親の後日談だが、「あんた こたつに頭を つっこんだら あかんよ」とおおいに笑われた。オレはどうも身体に悪い煙に弱いらしい。火口の臭いも温泉の臭いも身体によくないはずだ。

◎今日は来た道を下山した。帰りはだらだらスケッチをしながら下った。今まで山は登るもの、1時間ワンピッチ2,3分休憩に一本取ったらすぐ出発と決めていた。「山の中には オレの 絵になる形が あるではないか」と、七十歳を過ぎてやっと見えた。面白い素晴らしい、小さいスケッチブックに鉛筆を走らせた。

◎上の岩には氷が30,40センチも付いていた、すごいものを見せてもらった。登りはずっと雨が降っていた、雨具もザックもポシエットもずぶ濡れだ、ポシエットの中のカメラもそうとう濡れている。2時に駐車場まで降りて来た、「風呂はどうしよう 湯冷めでもすれば」と思案したが、まわりはなんだか晴れてきた、「え 久しぶりの 晴れの 天気ではないか 北海道に来て こんな穏やかさは はじめて」まずカメラを車の中に、濡れたものをぬぎ、350円の風呂に入った、熱い湯が心地いい、さっぱり着替え、「ちょっとここで絵を描こう」

16日 昨夜は寝る前に外でパソコンをしていた、1時間ぐらいで身体がチンチンと冷え、「これは 寒すぎる」と慌てて車の中に入った、寝床に潜り込んだが、いったん冷え切った身体はなかなか温かにならない。朝の車中の温度が4度だった、外はもっと寒かったかも、大阪の真冬だ。昨日の昼の硫黄温泉の熱さが懐かしいと思いつつ、誘眠剤を半分飲んで寝たが、案の定2時間ぐらいでトイレに起きた、次に目覚めたのはもう5時だった、しかもまだ眠いとぐずぐず30分ぐらい寝床にいた。誘眠君はなかなか優れもの。そうそう昨夜やっと星を見た。

朝の9時、陽が照ってきた、なんとうれしいことに晴れてきた、まだ快晴ではないけれどすぼんやりと陽のある場所がわかる、「さあ 今宵も オンネトーのキャンプ場に とどまるぞ」車内を片付け、湯を沸かしながら、1時間オジン走り。朝飯はスーパーで買ってきたパン、大盛りのごはん、みそ汁、ふりかけ、なかなか旨い。大阪では体重が70Kだったが、68Kに落ちている。キャンバスを広げた、絵の具を出した、色を入れた、今日は描ける、今日は乾く、初めてのお陽さんだ。描きながら昨日濡れたものをだし、車の上、石の上に並べた。雨具1時間ぐらいで乾いたが、ザック、靴、ポシエット、防寒ジャンパーは半日かかった。このあたりで有名な、アカエゾマツの葉は赤黒い、ほかの広葉樹も負けじとひょろり背が高い、ICレコーダーの音声を聞きながら、キツツキの音が聞こえる。毎日のように同じ上の方の場所で、「こんこんこん」と響くが姿は見つけられなかった。「しばれる」という言葉はじめて聞いたわけじゃないが、言われると新鮮だ。昨日も山の上、「こんなにしばれたら すぐに雨が氷になってしまう しばれるねえ」

今日は土曜日なので、北海道も大阪も同じように、続々と車がやってくる。ここに駐車する人のほとんどが、登山服に着替え、鈴を鳴らして登っていく。続々というわりにはたった8台だったが、そのうち3台は仕事の人だ。早朝一番に車を止め、暗くなりかけたところに降りてきた青年二人、おそろいのスタイル、背に蛍光のチョッキ風にヘルメット「お仕事ですか」「チジキを調べています」地磁気のことだろうと思うがそれ以上は無知の世界、帰って調べてみよう。<友人の上田先生からの情報：地球電磁学という分野、地球内部から宇宙空間という広い分野にまで及ぶ研究。世界的に（日本のデータも含め）各所の地磁気データが集められ観測されている。雌阿寒岳では、火山活動に伴う磁気の変化を調べていたのかな。地震でも磁気の変化は変化するらしい。気象庁：地磁気観測所の人らしい、最初に見た人たちとは違うグループかな。気象庁とはお天気おじさんのいるところぐらいにしか思っていなかったが、そういえば、地震、火山噴火でも気象庁の人が説明している。> もう一組は登山道整備の人。四合目と書かれ折れた角材標識を担いで帰って来た。木製の角材ゴミなのに担いでここまで降ろしてきた、木だから捨てるでもいいのにね、重いのにすごい。登山道整備、これは見るたびに頭が下がる、まして無償でやっている人たちには、「ありがとう」の一言だ。

なんとザックを担いだおっさんがやってきて、「ああしんど」とオレの横でへたり込んだ。その後晩飯をおごり話をするようになるが、その話はあとで。昔はザックを担いで北海道の道路を歩いて旅している人を何人か見たことがあるが、今回の旅では彼が初めて、40Lぐらいのザックに、シラフとテントをくくり付けやって来た。昨夜の雨の中、阿寒湖あたりのコンビニで、3時間ぐらいぐずぐずしていたらしいが、もう居づらくなり思い切ってここオンネトーに向かったという。6、7時間歩いたのかな。彼が、「明日 雌阿寒岳登りたい」という、靴は運動靴らしい。昨日も運動靴の若者が登っていたが、すってん転んでいた。晴れば登れないこともないが・・・。一日中晴れた、気持ちよく描けた、濡れたものも気持ちよく乾いた。

黒い岩に水が流れる湯の滝まで散歩。ログハウスの立派な休憩所、ここに解説文があるが、半世紀経ち、間違った部分もあるかなという感じ。昭和28年ここにマンガン鉱床があり3500T採掘された。今も微生物が温泉水からマンガン鉱床を成長させている。35億年前微生物が生まれ、光・水・二酸化炭素から酸素を生成した。

17日5時に目覚めた、たっぷり寝た、睡眠時間が十分だと体が軽い。だんだん飯のコツも覚えた。いつものように駐車場をぐるぐる走った、走っている間、コンロに火をつけ、ご飯をゆでた。弱火で1時間もゆでるとほっこりごはん、わかめいっぱい味噌汁、ふりかけに、ゆで卵、レタス、腹いっぱいだ。

昼過ぎまでうろうろスケッチをして、ここ、オンネトーを去る。港までふらふらどこかでもう1泊して船に乗ろうと思う。晴れた今日の一日、だらだら絵を描いた、このだらだらがよかった、最後にイイ絵ができた。なんの気なしに入れた一色が、効いた、「お イイ」よがりの雄叫びをあげた。絵は、「イイものを描こう イイものを造ろう」とうじうじしたところで、イイものはできない、できるときにしかできない、しようと思ってもできない、なので、イイものに会えた今はうれしいねえ。今回の、「ふらふらペインティング北海道Ⅱ」大いに楽しめた、雌阿寒岳も、オンネトーも、ほかの人にとってはただの観光地かもしれないが、オレにはじわじわ霊気が伝わってきた、どこかに精霊がいる。最後になってやっとイイものがつかめた、やったぜである。

森の中をチリンチリンいわせながらきよろきよろしている。木々の間を歩いているととにかく気持ちがいい。何か面白いものがないかと歩いている。先ほどから白い小さい花がいくつも落ちている、たぶん横にある大きな木の花、ずっと高いところから小さい花の付いた枝をいくつも落とすのは、鳥か、サルか、なにをしているのかな。背の高い木に大きな穴がいくつも、キツツキ君、同じ木に集中攻撃か、こちらあたりのキツツキはカラスぐらいの大きさ、そんな身体が入るぐらいの穴が五つ六つ、これじゃ木もたまらんね、枯れるね。

「今日は 雌阿寒岳が 見えるよ」と管理人さんに言われ、「それじゃ 先日 途中まで登った 展望台まで 行こう」と登り始めた。人が来ないこっちのコース、この森はいつ来てもいい。ちらちら雌阿寒岳が見える、これはすごい、登るにつれ、まる見えじゃないか、最後の最後に見せてくれますね、何枚もスケッチをした。こんなすごい山だったのか、上のほうは火山の爆裂の跡がまざまざ、山肌が、岩肌が赤く黄色く黒く、横の富士もおまけにしては堂々としている。よくまあ見せてくれたと感謝。

暑い、寒さがどこに行ったという感じ、力を出して登ると汗が出る、旅の終わり、体力もなくなってきている、ゆっくり道草を食って歩いた。

苔やら地衣類君たち、雨が止んで乾燥してくると、色も褪せている、彼らには雨がよく似合う。

粘菌を見つけた。「たぶんあれは ほんまもの ねんきんせいかつしゃ」オレンジ色のビラビラがきれいだ。

2時、お世話になった、オンネトーから出発、ほんとにここはよかったね。今回の旅、イイものが見つかった、昔は形にこだわっていたが、今回、「形はあるが そのくずしかた」「形なんて 何か別のものと 絡ませると いい」「形は大事だが イイ絵のほうがもっと大事」という声が聞こえた。魔性の声が響いた、「従います マモノさま」「おまえ わざわざ北海道まで行って こんな絵か どこでも描ける絵じゃないの・・・」「ぬかせ ほざけみじゅくものめ」

車を走らせながら、来た時の道に戻ろうか、まっすぐ南に下って、襟裳岬の手前を横切ろうか、「どうする どちらだ」松山千春のポスターのあるところで地図を見て思案した。スーパーで、船用のパンとレタスを買った。大樹(たいき)というところがある、その名前をナビに入れ出発した。相変わらずまっすぐな道、ほとんど車のいない道路ながら制限速度50Kの道を60Kぐらいで走っていると、どんどん皆さん追い抜いて行く。黒牛、乳牛、馬、畑も大きい、ブルドーザーで苗植えやら葉撒きやら、スケールがでかい、人も車も少ない。

大発見、畑の中に「丹頂鶴」がいた、白い身体に、黒い部分、あれはまず丹頂ですよ。あんまりでかくない。

またまた、大びっくり。大樹を目指していたが手前に、「虫類(ちゅうるい)」という道の駅がある、キャンピングカーがたくさん止まっている。ここでもいいかもと駐車した。ここはナウマンゾウの化石が出たらしい。ちょっと散策とぐるり歩き出したら、草の生えた広場にもいくつかの車やらテント、「ここは 無料開放ですか」「無料だよ みんな泊まっているよ」という。ここで寝ようかと車に帰っている道中に、「おかむらさ〜ん」なんと衣川さんじゃありませんか。彼は道東に居続け、最後の日に高速道路を吹っ飛ばし、5時間ぐらいで帰ると話していたので、こんなところでしかも偶然再会するとは、大びっくり。

18 日朝、同じように 5 時に目覚め、「1 時間ほど速足で歩こう」と山の方に向かった。車など走っていない二車線の立派な道、そこからスキー場という看板に添って砂利道を上にあがる。ひとっこ一人いない所、例の鈴はチリンチリン鳴らしている。てっぺんから麓を見ると、虫類の村が半分見える、のどかな田園地帯の真ん中に道の駅・温泉施設・ナウマンゾウ博物館・公園という近代的な設備が並んでいる。暖かい、先日来の寒さ、寒波のことを想うと暖かい、歩くと汗が出てくる。

車に帰って、ご飯に味噌汁という朝食、茶を飲んでくつろいでいると、我々の車の大阪ナンバーを見て、三重ナンバーのおっさんが、「大阪で地震があったみたい」という。慌て、車のラジオを点け聞いた。衣川さんはご自分のスマホで家族に連絡しているが不通のようだ。しばらくしてオレの娘から、「全員無事だけど アトリエ ぐちゃぐちゃ」と衣川さんのスマホに連絡があったと伝えてくれた。道路沿いの公衆電話で家にかけてみたが、混んでいるということで不通だった。「全員無事」という言葉を聞いて安心した、それ以上は考えなかった、水が、電気が、食料が、ライフラインが、なんて考えてもいかんともしがたい、帰り着くまでにはまだ二日間ぐらいの時間がかかる。とはいえ、高槻・枚方・茨木という地域限定の直下型地震と聞き、家に電話が通じる半日は気が重かった。ただ今日でよかった、オレの旅の最後の日、移動だけを考えたらいい日、ということでは救われた。旅の途中で地震と知れば、おちおち絵だ、山だ、といっておれない。ただ驚いたのは、「寿栄小学校で 女子児童が ブロック塀の下敷きになり 亡くなった」というニュースにはびっくり。オレが月 2 回通っている場所、今回の旅も、寿栄講座がある第一と第三木曜の間をこの旅の日程にあてた。帰った翌々日には寿栄に出向く予定だったが、帰った時点で、「休講」の連絡が入っていた。後日談だが、避難者救済のため一カ月以上かかるようだ。

大樹という名の道の駅、そこにほんまものの鉄道の駅舎の跡がある、ホームがある、ポイント切り替えのがっちゃん機械がある。北海道の鉄道はどんどん廃線化が進んでいる。先日会った大工さんが、「北海道の公共乗り物は値段が高い」とぼやいていた。オレの同年配の人たち、「ザックを担ぎ 列車に乗り ユースに泊まり カニ族といわれ」と懐かしい話をする。残念だがオレはそういう覚えがない、ひとりでも仲間とでも旅は少なかったね。大樹から半島を横切るように走る道、天馬街道と記されている。左右に山ボコボコ、草原があり白樺の幹が緑を引き立て奥に入るにしたがって小高く森が続く。きれいなところ、雨が降ってきたのか樹々も、オレのころも洗われる、いやオレのころはもはやきれい、ゆっくりゆっくり走る、気持ちがいい、素晴らしい。

ザックを担いで北海道を歩く男、大阪高石市の大工だという、53 歳でもう大工をやめたという。「疲れたあ」と絵を描いている横にへたり込んだ。「それじゃ 今晚 飯を ご馳走するよ」夕方になって、彼と二人でベンチに腰掛け飯を食った。鍋に水を入れてスパゲティーをゆで、玉ねぎをきざみ、炒め、付属のルーと麺を絡めた。「飲める?」「ビール一杯でダメ」缶ビールを渡し、オレはウイスキー。「明日午後 2 時ころに ここ オンネットーを出るから 好きなところまで 乗せていくよ」と言っていた。翌朝、車に座っていると、「お世話になった山に登ってきます」「2 時ころまで 居るから」と別れたが、2 時には来なかった。7 時間あれば一回りできるはずだが・・・名前も聞かなかった。彼は、「おやじさん」という、誰のことかと思ったらオレのこと、20 歳近く年が違うのだから、「おやじさん」も悪くないか。大工といっても、昔風の大工、機械は使うが、のこぎり、かな、というような古い道具を使って、本瓦、土壁、木の建具なんて工事をしてきたようだ。語録を二三。上等のカナが 30 万円ぐらいする、一年ぐらいかけて台を、刃を調整してやっと使えるようになるという、今も箱に入れしまっているが使っていないのでまた調整に半年ぐらいかかるかな。仕事はいつも地下足袋、指全部に力が入る、落ちるといふ最後の時に小指が落下を止めてくれる。木の柱と梁を組んで垂直水兵を確認してから、ヒウチで締める、これでもう動かない完璧。もうそんな家が欲しいという客がいなくなった、今は格好のいいプレハブやら、ツウバイフォー工法しか売れない時代、昔ながらの大工は用済みの時代だという。

19日この旅の最終日だ。昨日の一日は、港に向かってただ進むだけの日になってしまった。到着の翌日見た資料館にもう一度行きたかった。そこには北海道の動物・植物・アイヌ・開拓・明治から昭和の写真、それらをもう一度見たかった、最初の日に見たが、ずいぶん違った目になっている自分を見たかった、時間切れであきらめた。北海道の道はまっすぐ一直線にどこまでも続く、だれが線を引いたのかねと不思議な光景だ。普通なら地球の形そのままに、川やら山やらに沿ってたら曲線があるのだけれど。

夜中日付が変わるころ船は出航した。早速風呂に向かった。十泊の旅行中二度温泉に入ったが、その温泉、雌阿寒岳麓の温泉は硫黄の臭いプンプン、身体にはものすごくいいのだろうけれど、持参の石鹸が泡も立たない、髪を洗ってもなんだかゴワゴワ、身体も滑り止めを塗ったようで、快適だが、身体を洗ったという感じはしない。というわけで船内の風呂で2回も石鹸をつけ身体を洗った。シャンプーもたっぷりつけ、髪を洗った。往路の船の風呂以来、復路の船の風呂までまともに身体を洗えなかったとは苦笑のかぎり、ま、しばれる寒さが続いたから許せるよね、2回温泉にも浸かったことだし。

朝6時、船の中、洗面歯磨きの後買い置いたパンと水を持って後部甲板に出た。客が少ないようだ、一般客は20人ぐらいかな。お陽さんが出ている、暖かい、シャツ一枚で快適だ。往路の時は、ダウンを車から持ち込んでおけばよかったと悔やむ寒さだった。北海道から出航してまだ四分の一の6時間ぐらいしか経っていない、進行方向左手に山が見える、東北の山かな、津軽海峡は出たのかな。昨夜は船の乗り場に3時間も早く着き、パソコンを動かしているうちに眠くなった。1時間ぐらい爆睡、慌てて起き、「まだまだ 車は動かせない」とひと安心、となりの列にも車が並んでいる。「ドライバーは 車にお戻りください まもなく乗船です」ヘルメットの係員が切符の点検、「ライトを消して」と誘導、カバンを二つ持って部屋に向かった。10人ぐらいの部屋にはカイコ棚風のベッド、照明にコンセント、シーツが置いてある、清潔な感じだ。ロビーのソファーに一人腰かけ、ビール・ソーセージ・レタス・ウイスキーで1時間ぐらい、それから寝た。

昼過ぎから夕方まで、車を走らせながら電話を探すが、なかなか見つからない、携帯を持たないものの常套句のボヤキだ。薄暗くなったところにやっとマーケットの駐車場で公衆電話BOXを見つけた。「大丈夫?」「片付け てんやわんや 見舞いの電話で てんやわんや」という返事に安心した。

北海道では人けの少ないところ、車中泊で過ごした。驚いたのは朝明るくなる時間が大阪より1時間早い、3:30ぐらいには明るくなっている。そんなわけで夜は9時ころから寝て、朝は5時ころに起きる習慣がついてしまった。ただ、北海道は季節外れの寒さ、寒気団が居座り大阪の真冬並みに寒かった。船のベッドでも昨日と同じように5時に目覚めたが、行くところも用事もない船内、たっぷり昼寝が待っている。後部甲板で、海を眺めている。船が大きすぎ、潮の香りも漂ってこない、ビジネスホテルで過ごしているようだ。

夕方の6時過ぎ、敦賀港到着まで2時間強、先ほどから明るい光を散乱させている漁火の漁船が十隻二十隻と後部甲板に見えだした。陸地も近くなり、若狭湾に、敦賀港に入っていく。今日は大きな貨物船を4隻も見た。

「8:30 予定通り到着します 車へは 船が 接岸するまで 行けません」というアナウンス。ふたつのカバンをもって車まで階段を降りた。ナビはまだ北海道の港のままというのはなぜかな。ながらく順番を待って地面に降り立った、雨が降っている、本降りの雨だ。眠くなってはいけないと、助手席に水とレタス、ナビを自宅に入れ出発した。敦賀の街なかを抜け、大型トラックに挟まれ、80Kのスピードで狭い国道を走り抜けた。同じ船から降りたと思われる札幌ナンバーのトラックだ。なんと3時間で家にたどり着いた。地震見舞いに下の娘が来ていた。家の前に車を止め、「ガラス注意」と書かれた階段を靴のまま車の中の荷を2階まで運び上げた。洗濯物やら食料やらをとりわけ、ビールを飲んだ、「やっと終わった 北海道 乾杯」である。

二階のアトリエでぼうっとしていた時だと思うが、「えらく降るな 続くな 普通じゃないな」と天井にたたきつける雨の音を聞きながら思った。雨の音を聞きながら、「これ以上続くと ひょっとして 災害になる 地震が終わったばかりで なんでまた・・・」と不安がよぎった。

◎西日本を中心とした記録的豪雨の被害が広がっています。気象庁の出した大雨特別警報はすべて解除されましたが、各地で土砂災害や住宅への浸水が起きていて、3万人以上が避難しています。

◎ここ数日間で、同じような場所で大雨が続いていますが、場所によっては半年分ぐらいの雨が降ってしまったところがあります。地盤が相当緩んでいます、土砂災害の危険度が増しています。今なんとか耐えていたとしても、いつ土砂災害が起こってもおかしくない場所がたくさんあります。

◎西日本を中心とする今回の大雨は、梅雨前線が東日本から西日本の上空で数日間ほぼ同じ位置に停滞したことが原因。梅雨前線は、北側にあるオホーツク海高気圧と南側の太平洋高気圧が、日本の近くでぶつかり、停滞することで生じる。太平洋高気圧の勢力が次第に強まり、前線が北上することで梅雨が明ける。今回は暖かく湿った空気が前線に向かって流れ込む梅雨末期の典型的な降り方だが、前線が同じ場所に長時間居座ったことが異例だったという。

今回の雨、「ちょっと 雨の量が多すぎる 怖いな」と思った。今までは屋根を叩きつけるような雨でも何時間もすれば小降りになったり、やんだりしていた。今回のように一日中の雨、それが一日二日と続くことはなかった。毎日のように行っている安威川河川敷、そこにライブカメラがある、四六時中パソコンで見られる、それを見ていると、赤いラインの危険水域まではもう少し余裕がありそうだとまだまだ安心はしていた。河川敷を走りながら橋脚に蛍光塗料で水位のメモリが書いてある、「あ この図は カメラ用に 見る人が よくわかるように書いてあるのか」とカメラを見ながら思った。地震が6月19日、台風が7月4日頃に日本海を通り過ぎ、温帯低気圧になった、4日に比良山にという計画を中止した。その日ぐらいに、「関東の梅雨が明けた」と聞いたような気がするが、その翌日、7月11日ぐらいから雨が降り出した。我が住まいの近所の公民館などでは、まだまだ地震の被災者の避難所になっている。「なんでまだ いつ頃まで」と思っていたが、茨木じゅうのあちこちに、「この家にはもう住めない」「この家は住むには危険すぎる」という家がいくつかある。そんな家にいた人たちが帰るに帰らず避難生活を余儀なくされている、早急に新たな住居を、新たな避難所、というわけにはいかない、「早く出て行って欲しい」「早く出たいが 行くところが ない」みなさんもう時間がかなり経って、お互いイライラの募るころかな。

今回の異常気象、「地球温暖化が原因じゃないのか」オレは思っている。世界中の人々が、より快適に、より便利に生活するために、より多くのエネルギーを消費する。文明国日本を含め、世界中の人が、ちょっと質素に、ちょっと我慢、そのちょっとが、多少とも温暖化現象の制御になるかもしれない。「みなさん 贅沢はするな 質素に生きろ」と叫びたい。

気象庁：気候は地球規模で、私たちが経験したことがないものに変わりつつあります。現在の地球は過去1400年で最も暖かくなっています。地球規模での気温や海水温の上昇、氷河や氷床が縮小する現象、すなわち地球温暖化は、平均的な気温の上昇のみならず、異常高温（熱波）や大雨、干ばつの増加などのさまざまな気候の変化をともなっています。生物活動の変化、水資源や農作物への影響など、自然生態系や人間社会に表れています。将来、地球の気温はさらに上昇すると予想され、水、生態系、食料、沿岸域、健康などでより深刻な影響が生じる。原因は、人間活動による温室効果ガスの増加である可能性が極めて高い。大気中の温室効果ガスの濃度が急激に増加したことで、大気の温室効果が強まったことが、地球温暖化の原因と考えられています。温室効果ガスとは何か、オゾン・二酸化炭素・メタン・・・と言われるが、石炭や石油の消費、セメントの生産などが主である。

◎久子・栄一・岡村の三人で、「比良に登ろう」とやってきた。8時に坊村の明王院の石垣の横に駐車して着替え、武奈ヶ岳に向かって出発した。大雨特別警報からまだ二日も経っていないが、橋の下を流れる水量は普段とあまり変わらない、涼しい風が吹く、気持ちがいい。

◎ここ明王院の看板では、「平安時代の初めに建てられた 修験道場 太鼓回しという伝統行事が・・・」とおお聞いたことがある。大太鼓の上に飛び乗り飛び降り、という荒っぽい祭りを、画像で見たことがある。

◎登って行く、山の西側の斜面だがまだまだ湿っている、水が湧き出しそうなところもある、すごい雨だった。雨が終わった翌日に安威川河川敷に行ったが、まだまだ水の勢いは衰えていない、所々で河川敷の上まで流れが上がりかけている、「ええい バシャバシャとズボンを濡らして走った。土手の上近くまでの水量だと、土手もたっぷり水を含んで、じわじわ何日も水が染み出てくる。

◎湿った山の中には、「ケタイなもの」があちこちに目につく、「あ 白いツブツブ」「熊楠が言った 痰のような・・・」「黒いやつ」「かわいいやつ」次から次に現れる。「百足発見 あいつらの歩行スタイルは 優雅だねえ」

◎ミミズかな、と思ったら、蛭だ。「やだねえ 比良にも 蛭がいるのだ」先ほどからしゃがみ、膝や手をついて、写真を撮っていたが、噛まれたくないね、キャツにだけは。

◎モミの木。大きなモミの木があちこち、直径1Mはないが、天を突くでかいモミ、上品で凜としている、先日のアカエゾマツに比べると、暖かいところの針葉樹という感じ、木に上品も下品もないかな。

◎青梅のようなものがあちこちに落ちている、「クルミ」だそうだ。割ると中にクルミを思わせるビラビラ、なめると苦く酸っぱい。クマの好物だというのが、「クマ君 一度 正式に会おうね」

◎二本目、登ってきた、汗が出るが風が涼しい、心地いい、青空もちらちら見える。山の緑が身体じゅうに押し寄せる、水をたっぷり含んだ初夏の樹々、いよいよ盛んに騒いでいる。

◎「ギンリュウソウが ないかなあ」と思って歩いていた、「おおお 発見」呪術が通じたのかと思うような突然の出現、「さすが悟った人は ちがうねえ」「前回見たものと形状が違う 上に球がある 色も茶系を帯びている前回のよう透明な白ではない・・・」でも10本ぐらいの束になっている、「おおお すばらしい」帰って調べると、球のあるものもあるようだ。横に紫色を帯びた黒いキノコ、いろいろ、ケタイ君でてきますねえ。

◎名前はわからないが、セミの声、鳥の声が聞こえる。蟬の姿はまったく見えない、鳥も一瞬見えることもあるが、パツパツと木の枝、木の葉に隠れて黒っぽかったか白っぽかったぐらいしかわからない。知っている人なら、「あれはなんていう名の・・・」とその鳴き声から生態からを話してくれるのだが、オレには何もわからない。キノコ類も今日はたくさん見た、それと、例の、赤いちょんまげ君、今日はほとんどちょんまげがついていなかった。ひとつちょんまげ、赤ではなくくすんだ茶色のちょんまげ君がいた、赤くおしゃれなものじゃないね。御殿山という所にやってきた、ここから武奈ヶ岳がよく見える、ずっとたどっててっぺんの標識までまる見えの場所、あと一本でてっぺんだ。

◎12:30 武奈ヶ岳山頂到着、「気持ちがいい まるみえ 360度まる見えだ ちょっと霞んでいるが 気持ちがいい 釣瓶が岳・蛇谷が峰・釈迦岳の手前にアンテナ・スキー場跡・琵琶湖バレー・赤坂山方面も見える・琵琶湖・日本海は見えないか・こちらは小さい山々・蘆生へ行く谷筋に小さい村が見える・・・」

◎飯は弁当を作ってきた、いつもの奴である。玄米ご飯、小豆ともち米を少々混ぜている、それに梅干を入れる。玉子焼きと野菜炒め、菓子パンは2個食った。相変わらずの燃費の悪さ。梅干は今日で最後の一個、昨日梅雨が明けたというので漬けた梅干をベランダで干した、二日間半日ずつ干してこれで食べる、4キロ漬けた。

◎1:30 ゆっくり下りはじめる、半袖で暑くも寒くもない、ちょうどいい、気持ちがいい。

◎あと少しで車のところに帰ってきた、「いやあ 楽しかった よかった」水は2リッター持って行ったが全部飲み干した。「暑くはない」だの、「涼しい」だと言っているが、8時から出発してもう夕方だということに小便は一回しか出ていない。汗が相当出ているようだ、シャツもなんだか汗臭い、ふもとについてお寺の手水の水をごくごく飲んだ、こんな山のお寺、水も汚くはないだろう、あたってもオレは大丈夫という精神だ。

◎「行きたい山は？」Mさんが「戸隠 行きたい」と戸隠山が決まった時点で調べてみた。40歳代に故阪口さんと火打山に、50歳代に故澤山さんと雨飾山に登った、ということはあったが、オレはこの付近、あまり縁のないところだ。「うれしい 実家の近所」とAさん。戸隠山を調べて見ると、「怖い山 危険な山」という話がしきりに出ている。「ま 行ってみて様子を見よう 高妻山も隣にある」ということで1カ月前に戸隠キャンプ場を予約した。1泊5000円のバンガロウを7/15・16日で予約した。ところが、日本列島のほとんどが梅雨前線の大暴れで、一週間順延の電話を入れたが、行く直前に確かめると予約が完了していない。「テントになるか・・・」とあきらめ、テントを積んでキャンプ場に着くと、連休にもかかわらずバンガロウが空いていた。「おお それはありがたい」と1万円2日分を支払ってバンガロウに入った。

◎4:30起床。バンガロウの二段ベッド上段より、「起きるよ」と増谷さんの声に全員起床。オレは、「ちと早いな」と思いつつ起床。相澤さんは普段が寝坊習慣なので、「ええ もう起きるの」と不満声。前川さんは、「飲みすぎですぐ寝たが しばらく経ったら寝られなかった」と辛そう。コンロに火を点けコーヒーが入る、それをごちそうになり、昨夜のスープにご飯を入れたおじや、パンを食べて腹ごしらえ、6時には出発できた。今回、「戸隠」という提案だったが、「ちと怖い山 70歳代には危険な山 隣の 高妻山にしよう」ということに決まった。

◎初めての山なので登山口が何処なのか地図で確かめ、「どうも キャンプ場を突き切って 行くようだ」と歩き出した。ここは牧場の広大な敷地の一部をキャンプ場に行しているのか、キャンプ場自体が広大、夏の連休ということで車だけでも100台以上、テントも100張以上は在るのではと思われる。山の方は戸隠の、凸凹した形がなんとも気持ちの悪さを感じさせる、「あんな凸凹の 細い峰を 歩くのは やだね」丸くどっしりでっかい山は心地いいが、浸食された地形の一部を細くナイフでカットしたような形、怖がりのオレには不向きだ。

◎キャンプ場→避難小屋→五地蔵山→高妻山→五地蔵山→弥勒尾根を通過して帰る。というコースを選んだ。なんと11時間もかかってしまった、しかもなかなか危険な山だった。避難小屋までは谷筋、いくつかの鎖場があり修験道の山という感じ、岩が水に濡れ夏場は涼しいが滑ると怖い。五地蔵に向かう道々で高妻山が徐々に見えてくると、「ええ あれを登るのか」というような丸くどんがった山、急な登りを覚悟。弥勒尾根は去年ぐらいにやっと認可された登山道だが、危険もなく歩けた。高妻山が2353Mなので、上の方も樹林帯の山である。

◎大きな栃の木が根から倒れ葉っぱが赤に黄にまるで紅葉のように輝いている。鳥の音がチチと鳴く。「ホ～ ホケキョ ケキョ ケキョ・・・」「カッコウ」「ピ～ピ～」姿は見えない。

◎広葉樹林帯の谷筋を登って行く、草も背丈ぐらいいまで茂っている、草が多いのは鹿がいないのかな。

◎避難小屋の下あたり、大きな一枚岩の上をトラバース、ここには鎖が渡っているので簡単に歩けるが、その最後が2Mほどの鎖の登り、足がひっかかる場所がない、「あちゃちゃ」鎖を引いて足を踏ん張りよじ登った。MさんとAさんを引っ張り上げ、「氷の清水」と書かれた美味しい湧水を飲んだ。反省会で、「オレを 引っ張って くれなかった」とベテランのMさん、「がはは」である。

◎避難小屋がある、板張りの床、引き戸の扉は隙間が多く、雪が風が舞い込みそう。「避難小屋なので みだりに宿泊しないように 尿尿の害で 水源が汚れます」と書いてある。9時過ぎ出発、ここからは尾根道だが、この山はまだ木がいっぱい眺望はききにくい。それでも戸隠の麓の草原がきれいに見える、高妻山もポコリ姿を現してきた、空は青空と白い雲が半分ずつぐらい、暑い、時には涼しい風も吹く。

◎まだ50歳代だったか、澤山・山下・猪熊・オレぐらいのメンバーで、静岡県の大無限山に行ったことがあった。今調べると、「南アルプス南部：静岡県：2330M」と載っている。当時澤山さんが、二百名山踏破を目指していたので、我々を引っ張って行ったものと思われるが、なんだか面白くない山だった。「こんな 木ばっかの山毛のある山は やだよ 何にも 見えないじゃん」と山下さんがぼやいていた。「山は 見わたせなきゃ」そうだね、景色を堪能したいね、木の幹、木の葉ばかりじゃつまらないねとオレもそう思った。今登っている高妻山も大無限山と同様の高さ、尾根道でさえも背の高い樹々で覆われている、山下さんの言葉、「毛 ばっかの山 やだよ」を思い出し苦笑、山下さんは東京でまだまだ健在だが、登山はもうやめて久しい。

◎五地蔵で昼食。湯を沸かしてカップラーメンとパン、ここからみなさんは降りるという。「それじゃ オレ 高妻山まで 行ってきます」と出発した。この山は花がきれい、大きな花から米粒のような花までたくさん咲いている、赤に黄に白に紫、花好きの人にはたまると思うが、今のオレは花よりケタイ君である。

◎この山は仏教信仰の山なのか、修験道の山なのか、観音・不動・地蔵というような名前を冠したところが多い、そこには石の祠が置かれ賽銭がいくらか置かれている、昼頃になって、いよいよ暑くなりだした。日照りがぎらぎら、背中が熱い、汗が流れる、とはいえ霞がかかり視界は悪い、目的のポコリンも見えたり隠れたり。

◎もうすぐ頂上だろうと思う、岩場になり、鎖・ロープが次々出てくる、この暑さも加わってなかなか手ごわい。この山は若者が多い、二十、三十、四十歳代という連中がスイスイ登って行く。

◎1時に下り始めた、「あれは 白馬」向こうに雪をかぶった高い山がそびえる。岩場は気を付けて下ろう。まわりに雲がかかりはつきりとは見えない、そういえば今年の山々、全山はつきりまる見えということがなかった。

◎みなさんと別れた五地蔵に帰ってきた、「いやあ 疲れた バテバテだ」朝作ったサンドイッチを食った、トマトとレタスを挟んだ、野菜の水気が多く旨い、予定よりだいぶ遅れている、水もコップ一杯ぐらいしか残っていない、たっぷり2L持ってきたが、この暑さで飲んでしまった。避難小屋から帰れば、氷清水の湧水が出ているが、向こうを回ると時間がかかりそうなので、ここ弥勒尾根を降りることにした。

◎まだかまだかと、弥勒尾根を2時間半かけ降りてきた。牧場に水が湧き出たところがあったので手ですくってごくごく飲んだ。なんと朝6時に出てまもなく夕方5時、久々の11時間行動になってしまった。

◎「いやあ ごくろうさん まずはビールを飲んで」と荷も降ろさないうちからコップを渡され、ゴクリゴクリとお代わりをした。「美味しい 次は シャワー」8分/300円のシャワー室に入り、ごしごし体を洗い、熱い湯を浴び、汗だらだらで出てきた。昨日の到着の日の晚餐は野菜類たっぷりの豚鍋、今日はカレーライス、いつも材料を用意していただき美味しいものが食べ、感謝である。

◎最終日も起床は早く、6時にはコーヒー、あちこちに転がっているパン、ソーセージ、たくさん食べた。「戸隠神社 奥社に行こう」とバンガロウのそばの道から参道までの自然道を1時間かけて歩く。この「ささやきの小径」という名の道が素晴らしい、鬱蒼と樹々が茂っている。ホトトギスがいい声を奏でる、ほかの鳥もいくつか鳴いている、そういえばフクロウの声は聞かなかった。説明看板では50年100年前にはエネルギーのためか、紙のためか、樹々が伐採されたそうだがそののち森が再生したそう。関西にも炭焼きのために切られた木から、新芽が数本伸び枝分かれした細い樹々をいくつか見たことがあるが、この木はそのスケールがでかい、ひとだかえも、ふただかえも、あるような太い木が枝分かれして伸びている、堂々とりっぱな樹々が鬱蒼としている、その鬱蒼さが素晴らしい。所々に木の名前が書いてある、「おお あれが これが・・・」と右から左に読めたということは、読んだすぐから右から左に忘れてしまったということだが・・・。

◎参道にはでっかい並木が連なっている。「ヒノキだ」と大きな声で行った尻から、「スギと書いてあるよ」と言われた。なんとスギとヒノキの区別がわからなくなってきている自分に愕然、昔ははっきりわかっていたのだが、と自身のボケに驚く。このスギの並木も堂々とした立派さだ。

◎奥社もいい感じの神社だった。戸隠神社そのものがいい感じなんだね。この森は何度もいうが立派な森だ。

◎看板：奥社社有林、トチノキ・ハリギリ？・キハダ？・ミズキ？・シラカンバ・シナノキ等の冷湿地帯に育つ夏緑広葉樹林です。一度伐採された後に育成した森で、高木、中低木。草木の構造になっています。一部のカラマツ林。カラマツは東北。中部地方にかけ自生する落葉針葉樹です。と説明を読み、信州の山々に黄金色に輝くカラマツ林を思い出す。植林され、土木建築用材になったそう。

◎故澤山さんが、「夏は アルプスだよ 低い山は 暑い」戸隠周辺の山は、2000M級の山、暑く、しかも危険印が多い。ただこのまわりの草原の雰囲気はよそにない素晴らしさ、しっとりさ、もう少し近ければもっと来たいところだ。信州と言っても新潟県に近い、車で走ると、6~7時間かかってしまう。帰りの運転で、美味しい寿司を食って、「これぐらいの 腹八分目 なら・・・」と運転しだしたが、眠い眠い。

喜田貞吉著<賤民概説>1939年には亡くなくなっておられる歴史学者、著書の中で自分のことを、「余は・・・」とおっしゃる、この、「余」という使い方を調べたが載っていない、ただオレはこの言葉は普通に接していた、少し昔の小説や時代劇で出てくる言葉だ。なぜネットに解説がないのか不思議。先生が活躍した時代：昭和天皇時代、大阪地下鉄開通、二・二六事件、日独伊防共協定、というような時代風景。先生は賤民のことを社会の落伍者として話を進められる。「間違っている部分 思い込みで書いておられる部分 あるやも」と思いつつ読んだ。

◎賤民の定義、「賤」は「良」に対する呼称で、一般民衆を良賤の二つに分けるなら、良民以外はみなことごとく賤民になる。しかしながら、何をもちいてその境界とするかについては、時代によって一様ではない。大宝令には五色の賤民があげられている。

◎大宝律令：昔習ったねえ、701年に制定された日本の律令で、「律」6巻・「令」11巻の全17巻。

◎平安中期以降、大宝令にいうところの賤民のあるものが、その名称のまま社会の上流に登り貴族の地位を獲得したのもあれば、良民として認められていたものが、その名称のまま社会のどん底に沈められ、賤民の待遇を強いられたこともある。社会的に賤しいとされた職業がその後の時代に、賤しまれなくなった職業もある。

◎ヤッコ（日本紀では）奴婢 良民と通婚を許さぬばかりか、同じ賤民同士の仲間でも、当色の者同士のみ通婚が許された。奴婢の起源は、征服せられた、捕虜になった異民族。生存競争の劣敗者、社会の落後者、犯罪者。

◎五色の中の陵戸：陵墓（宮内庁管理の墓）の守、穢れに触れるという思想から、賤視されたものと思われる。

◎侍：家人（けにん：奴婢と共に主家に臣従し、労役に服した最下層の民）たる従者、賤民が武芸を錬磨、刀剣を帯び主人を警護するようになり武士と呼ばれる。源頼朝が天下の政権を掌握するに及んで、源氏の家人たちも大大名になった。敗者たる平氏の家人が没落したことは言うまでもない。

◎ウカレビト：浮浪民は人類発生とともに在り歴史にも見えていた。少数の祖先以来浮浪生活を続けているものもあるが、中世以後事情あって原籍地から逃亡した、その中には地方官の悪政から逃亡したものが平安朝には多かった。犯罪、人間関係、負債などの理由があげられる。

◎浮浪民たる傀儡子・遊女。鎌倉時代は人形まわしのみではなく、狩猟を業とし、女は遊女として生きていた。

◎非人は食物の生産者ではない。故に何らかの方法で食を生産者から乞わねばならない。「乞食」である。

◎万葉集に、「乞食の詠」が二首あり、ひとつは漁師、ひとつは狩人。農民の造った五穀に頼る乞食であった。

◎俳優、人形まわし、遊芸者を河原乞食と言った。彼らは、「ホカイビト」「祝ぐ」祝言を述べ、食を乞うた。

◎自由労働者が手伝い（てったい）として流れていった。掃除、建築土木の助手、井戸掘り、墓ほり、雑多な家内工業、行商人、移動芸術家・・・。特異なものに社寺や村落に付属して治安維持のための警察業務。盗賊の番、火の番、野の番、山の番、押し売り強請者を追い払い、行き倒れの取り片づけ、行路病者の保護・・・。

◎エタは屠殺業者、皮革業者で、職業上当時の迷信から、その身の穢れ多しとし、穢多と呼ばれ、その他を非人と呼んだ。これも定説ではなく、地域により、時代により、違ってくる。元々彼らは、河原の者であり、坂の者であり、散所の者であった。エタという名称が見えたのは鎌倉時代に、「穢れ多し」としてエタと読ませているが、本来は、「餌取」鷹（鷹狩り）や犬（犬追物）に食わせる餌を取る職業だったという。

◎触穢の禁忌とは、我が神明甚だしく穢れを忌み給うがゆえに、それに触れたものは神に近づくべからずという思想で、その穢れの中でも、中世には肉食が最も重いものとなっている。奈良時代までは一様に肉を食べていた。

◎仏法では殺生肉食を悪事とし、神道の方でもこれを非常なる穢れとして排斥したが、屠殺業も、皮革業も社会にとって必要な職業であった。

◎「オンボ」この言葉は、オレが子供時代聞いた言葉、焼き場の管理をするおっさんだった。広い墓場の中に小屋があった。小屋の中の炉に薪敷き並べ、その上に棺桶を置き、参列者みんな火を点けた。参列者が帰った後は最後まで遺体を焼いてくれた。薪がよく燃えるように棒でつついていたのを覚えている。「御坊」「土師部」葬儀のことを司る仕事。「隠亡」とも書き、元来は非人法師であった。

柳田國男著<毛坊主考>民衆史の遺産、という全集の中に、この先生の名前がちょくちょくでてくる。この先生は民俗学の第一人者として皆さん取り上げている。遠野物語の著者でもある。さて本の出だしに興味のある地名が出てきたのでまずそれを紹介します。それから次々、「毛坊主」というケタイな題名ながら、笑ってしまうようなばかげた話が、先生の絶妙のタッチで読ませてくれる。柳田國男という人は文章の達人だねえ。

◎飛騨の荘川の谷は上流よりも下流の方が深い山家である。上流には車力の通う県道が開かれ、わずかの峠で美濃へ超えられるのに、川下へ向かう左岸の路は次第に細くなり、家の建て方もますます異様に見えてくる。白川村の口元には大家族をもって有名なる御母衣・平瀬などの部落がある。それから越中（今の富山県）の五箇山までただただ穴の中へ入りこむような感じである。

◎上記の文がいつ頃の話なのか、でてくる地名が、「おお 行ったことがある 通った道だ」と懐かしい。とはいえ、オレが行きだしたのはこの30年、山に行く途中で何度も立ち寄っている。荘川から美濃へ車力というのが、車力とはなんだろう。大八車を想像するが、そんなものでわずかの時間に美濃まで行けるものかと思ってしまう。百年も前の話となると、あの山奥の風景、今のように高速道路はおろか、県道も在ったか無かったか怪しい、御母衣ダムがあるはずもなく、荘川という川だけが昔から変わらず流れていたと思われる。東海北陸自動車道がいつごろできたのか忘れたが、飛騨清見ICから高山市を抜け新穂高方面には何度も行った。御母衣湖や荘川桜のそばを通過して大白川ダムから白山にも登った。白川郷や五箇山も何度か訪れた。先生が言うような、「穴の中に入り込む」とは面白い表現だと思うが、今の時代、交通機関が発達して、こんな山奥でもひとつ飛びで行ける時代、ここらあたりは観光地のひとつになってしまったが、百年前のこのあたり、見て見たかった思う反面、歩いてよくまあこんなところまで行ったものだと感心もする。さて、毛坊主とはなんだろうと読んでみて笑ってしまう・・・。

◎国境近くに小白川（今でも小白川郵便局などは残っている、国境というから越中五箇山に近いところ）という大字があったと思う。路傍の小屋のふちに腰かけて雨に濡れ、佻しい弁当を食べながら、ふと薄暗い座敷の中を覗くと、この家に不相当な大きな仏壇がきらり光っている。この辺は真宗の盛んな処だと聞いていたがなるほどそうだとすると、道ずれの越中の人が、おまけにこの家はお寺です、上を御覧なさいという。今まで気が付かなかったが縁側の天井にまさしく径尺七八寸（60センチぐらい）の釣り鐘がつってある。それから住職もそこに働いていた。万筋（細い縞模様のことらしい）の単衣か何かで雨の中厩肥え（家畜の糞尿と藁や葉っぱを牛馬に踏ませて腐熟させた有機肥料）を運んでいる。根っから愛想のない男だ。そしてすこしも坊主らしくない。頭には我々よりも長い毛が生えている。自分はははこれが例の毛坊主だなど思った。しかしその想像は当たっていたかどうか今もってわからない。

◎「本朝俗諺志」飛騨の山中に毛坊主というあり。農業・木樵をなすこと常の百姓並なり。はるか山奥にて出家などはなき処なり。人死したるときはこの毛坊主を頼みて弔うなり。代々譲りの袈裟をかけ鉦打ち鳴らし経念仏してとぶらふことなり。俗人にて坊主の役をする故かく名付けたるなり。常の百姓よりは一階劣り縁組などはせぬことなり。別の書には。この者どもいずれの村にても筋目ある長百姓として、田畑の高を持ち、俗人と言えど出家の役を勤める身なれば、あらかじめ学問もし経文をも読み、形状物体筆算まで備わらざれば人も帰伏せず務まりがたし。

◎遠州・三河・美濃・河内などにも毛坊主あるよしに聞けり。山村において住民がお寺に不自由することはまことに我々が推察のほかである。医者がなければ売薬で間に合わせるということもあるが、死んで後の救済には越中富山の反魂胆にあたるものが無い。ずっと昔は仏法にも一種のオイチニのごときものが在ったけれども、宗門改めや何かの関係から檀那寺が必要物になって、山に住んでも無為には死ぬことができない。

◎寺に居るから僧だとも、妻子があるから俗人だとも推測しえぬ。今でこそ僧侶が税も納め兵役にも取られるが・・・。村に住む者の必要からいうと、まるまる僧のおらぬよりは偽物でも未成品でも葬礼法事の節わずかの経の読める者がいた方がよろしい。かくのごとくにして田舎における僧という者の定義は昔から朝廷の標準とは合わなかったのである。

網野善彦著<中世の非人-非人と遊女>

◎娑婆羅：覆面をし、足駄（下駄？）をはき、皮の鞆（しとうず？）を付けた、異形の人々。後醍醐天皇が僧の文観を通じて非人を動員した結果であり・・・語源はサンスクリット語でダイヤモンドを意味し、平安時代、雅楽、舞楽の分野で伝統的な奏法を打ち破る自由な演奏を娑婆羅と称するようになった。南北朝時代の社会風潮や文化的流行をあらわす言葉。公家や天皇といった時の権威を軽んじ、嘲笑し、反発し、奢侈で派手なふるまい、粋で華美な服装の美意識など・・・と聞くと、オレはなんだか気持ちが騒ぎ嬉しくなる、ばかだねえ。娑婆羅の活躍は知らないが、踊念仏には興味があるので、後日調べてみなくては。

◎若者のエネルギーということで、まずふたつのことが頭に浮かんだ。ひとつは先日、麻原彰晃の死刑が執行された。麻原彰晃が若いころ、売り出し中の華やかな頃、その華やかさを追っているマスコミ録画を見た。もう一つはオレが若いころの学生たちの、学生運動の言動。これは深くは理解していないので、「それは違うぞ」と反発を食らうかもしれないが、「深い深い 理論があるのだ」「それは知らなくて ごめん」とオレの返事。麻原が、「私の考えに 反するやつは殺せばいい やっつけてしまえ そして我々も 死ねばいい」とTVのマイクを片手に楽しげに語っていた。学生運動でも、同じような言動を聞いたことがある。人を、自分たちの前に立ちはだかる体制側の人間を、殺す、抹殺する、また自分たちも殺され抹殺されてもいい、と言っていた。「人を殺し 自分もまた 死ぬ」これはいかにも過激な言葉だと思うが、二十歳前後の若者たちはそんな言葉に陶醉し、高揚し、自身の思想の中で、死が、破壊が気軽に語られ、気軽に実行されていったように思う。オレは二十歳の時代でも、むろん今も、他人の死を、自身の死を、華美な物とはうつらない。

◎木曾義仲が後白河法皇を襲った時、法皇側の官兵。「向へ礮、印地（石を投げる戦闘技術）、云う甲斐なき辻冠者原、乞食法師ども」時の天皇・法皇が差別の対象になり始めたこれらの人々を、兵として使っていた。

◎16C、清水の坂の者が、淀の魚市で公事（税や雑役）を徴収された不当を訴え、自らを、「人非人」といい、「諸国を自由に往返して塩を売る権利を与えられている」と主張。

◎「穢多のことなり」と禁中への参入を禁じられていた河原の者が、作庭に携わり「禁裏御庭者」としていた。

◎中世、天皇や神仏は、非人、河原もの、以外に、商工民、芸能民、呪術的宗教者、多くの職能民が聖なるものと結びついて、自らを、「神奴」「寺奴」と称し、聖別され特権を保証されていた。

◎現代のわれわれが、職人のみごとな腕前、職能民の駆使する技術、演ずる芸能、呪術、これらに感動する。職能民自身も自らの背後に神仏の力を感じ取っていたに相違ない。

◎16Cポルトガル司祭フロイスの日本覚書「日本女性は純潔を重んじない それを欠いても 名誉は失わないし結婚もできる」「日本では意のままに いつでも離婚できる 名誉は失わないし 結婚もできる」「日本女性は親にも夫にも知らせず 幾日も ひとりで好きなのところに出かける」「比丘尼（出家した女性）の僧院は 淫売婦の町になっている」

◎中世、女性の一人旅の姿が、物語や絵巻物で多く見られる。女性の一人旅で強盗、暴行、殺人が多く語られる。絵巻物にも、一人旅する女性たち、壺装束、市女笠、巫女の姿に似た服装をしているものもある。

◎多種多様な女性の商人をはじめ、女性の芸能民、宗教者たちがあらわれた。女性の商人は多い、魚売り、酒売り、餅売り、塩、帯、・・・社会的分業の発達による職能の分化とともに、女性全体の社会的地位の低下が進む。

◎「性」の部分の遊女たちに対する蔑視も顕著になっていった。白拍子、曲舞、立君、辻子君、巫女、などの芸能民、宗教者、垂髪で眉をそり落として、茫茫眉（？）を描いており、遊女との重なりをうかがうことができる。

◎「性」を「交易」する遊女たち、かつては神との関わりを持ち「公庭」の所属ともいわれて、高い地位を保っていた遊女たちであった。天皇自身の後裔と自らを位置付けた遊女、傀儡たちの特異な伝承は、聖から賤への転換に直面した彼女たちの自己主張であった。江戸時代に、「苦界」と言われながら遊郭は、文化の源泉のひとつでもあった。